

氏名	金 善眞
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第3018号
学位授与の日付	平成17年 9月30日
学位授与の要件	文化科学研究所人間社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	日本語における文末引用形式についての研究
学位論文審査委員	主査・教授 宮崎 和人 教授 辻 星児 教授 江口 泰生 助教授 京 健治

学位論文内容の要旨

本論文は、現代日本語文の文末に出現する「ッテ、ト、トカ、トイウ、トイウノダ、ト聞く、トイウコトダ、トノコトダ、トイウ話ダ、ダッテ、トイウト、ダト、ッテバ、ッタラ、ナンテ、ット」などの表現形式について、多数の用例にもとづきながら、その構文的な特徴や機能について詳細に論じたものである。分量はA4判40字×36行×163頁で（目次を除く）、400字詰め原稿用紙に換算すると、約587枚に相当する。

分析において本論文が重視するのは、次の二つの観点である。一つは、典型的な引用構文と比較して、これらの形式が用いられた文がどのような構文的な特徴をもつかということ、もう一つは、引用文として表現された内容の情報源は誰（第三者・聞き手・話し手）であると考えられるかということである。すなわち、これらの文末形式をあくまでも引用構文研究の枠組みで分析するというのが本論文の基本姿勢である。

本論文は、5部10章から構成されている。第Ⅰ部（第1、2章）は序論にあたり、第Ⅱ部（第3、4章）は本論文で用いる場の二重性や情報源といった概念に関する基本的考察、第Ⅲ部（第5、6、7章）は一つの形式における情報源等の諸条件の違いによる機能の異なりに関する考察、第Ⅳ部（第8、9、10章）は情報源が共通する形式群のモダリティ形式としての機能の違いに関する考察、第Ⅴ部は結語である。章ごとの内容は、以下のようである。

第1章「本論文の立場と枠組み」では、本論文の出発点として、「引用」といった概念を「ある場で得られた情報を別の場に取り込む言語行為」と定義し、典型的な引用構文を「主格補語+引用文+引用助詞+引用動詞（過去・断定形）」の構造をもつ文であると規定する。

第2章「引用および文末引用形式に関する先行研究」では、本論文に関連するいくつかの先行研究を種々の観点から整理し、論点を検討する。

第3章「場の二重性について」では、典型的な引用構文の特徴である場の二重性が文末引用形式の機能とどう関わっているかを概観する。例えば、第三者からの情報を伝える場合は、基本的に場の二重性が維持されるが、聞き手の言ったことを問い合わせ返す場合や発話時現場における話し手自身の発話の後に引用形式が用いられる場合には場の二重性は典型的な形では成立しない。

第4章「情報源と文末引用形式の機能」では、引用文の発信者を「情報源」と規定し、当該の文末引用形式は、情報源が第三者である場合には主に伝聞形式として、聞き手である場合にはある種の疑問形式として、話し手である場合には終助詞的に機能することを指摘する。

第5章「「～ッテ」文」では、「ッテ」の機能が、主格補語が現れるか否か、当該文の後にどのような動詞（テンス・ムード）が想定されるか、場の二重性はどうか、情報源は誰か、といった条件に基づいて、典型的な引用構文から離れて、伝聞、問い合わせし、働きかけなどへと移行することを指摘する。

第6章「「～トイウ」文」では、いわゆる伝聞を表す「トイウ」は典型的な引用構文と同じ構文要素をもつことができるが、場の二重性が成立していないことを指摘し、情報源の表示法（主格補語、「～ニヨルト」、不特定）の違いによる機能の違いを説明する。また、情報源が一人称や二人称の場合のモーダルな意味についても言及する。

第7章「「～トイウノダ」文」では、「トイウ」に「ノダ」が付いた複合形式「トイウノダ」を取り上げ、その機能が、情報源（主格補語）の違いに応じて、第三者から言わされたことを伝える、聞き手の真意を問う、話し手の発話時現在の認識を提示するなど、多様であることを示す。

第8章「第三者を情報源とする文末の引用形式」では、第三者が情報源である場合に用いられる文末の引用形式として「ッテ、ト、トイウ、ト聞ク、トノコトダ、トイウコトダ、トイウ話ダ、トカ、トイウノダ、ダッテ」を取り上げ、言わされたことを伝えるか、聞いたことを伝えるか、話し手の情報の捉え方をあわせて表しているかといった観点から、各形式の機能の違いについて考察する。

第9章「聞き手を情報源とする文末の引用形式」では、聞き手が情報源である場合に用いられる形式として「ッテ、ト、トイウト、ダト、ダッテ、ンダッテ、トイウノカ」を取り上げ、聞き手の先行発話のなかに不明な部分があるか否かということや不満や驚きのニュアンスといった観点から、これらを分析する。

第10章「話し手を情報源とする文末の引用形式」では、話し手の当該発話に付いて終助詞のような働きをする形式として「ッテ、ッテバ、ッタラ」を取り上げ、各形式について、聞き手の認識への働きかけ、発話時現在の話し手の認識の提示、自身の発話を茶化す、実行予告としての意図表明などのモーダルな働きを分析した。

最後に、V結語では、情報源が第三者→聞き手→話し手へと移行するのと並行的にモダリティ形式化も進行するという見方を示し、本論文を締め括っている。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2005年7月4日、学内審査委員4名（現代日本語学1名、言語学1名、国語学2名）によって行われた。審査の結果は、以下の通りである。

本論文は、現代日本語の「ッテ、ト、トカ、トイウ、トイウノダ、ト聞ク、トイウコトダ、トノコトダ、トイウ話ダ、ダッテ、トイウト、ダト、ッテバ、ッタラ、ナンテ、ット」などの文末表現について、多数の用例にもとづきながら、その構文的な特徴や機能について詳細に論じたものであり、5部10章から成る。執筆の過程で発表した、紀要論文2編と査読付き学会誌論文1編が参考論文として添付されている。

本論文の優れている点は、何よりもまず、その方法論的な妥当性にある。これらの表現形式は、それぞれ何らかの程度に文末形式として固定化しており、モダリティ形式として分析することも不可能ではない。しかし、申請者は、安易に最初からモダリティのカテゴリーに押し込めることをせず、あくまでもこれらを引用表現として観察し、引用構文としての典型性の度合いを測るという立場をとる。具体的には、これらの形式が用いられた文が構文的な特徴と場の二重性に関して典型的な引用構文とどのように共通しどのように異なるかを慎重に検討する。そして、引用文として表現される情報内容が第三者・聞き手・話し手のうちの誰からもたらされるものであるか（これを情報源と呼ぶ）ということを、機能分化の最も重

要な条件として考察する。そうしたことを踏まえて、最終的にモダリティへの位置づけを検討するのである。

申請者のこうしたアプローチは、引用に起源をもつ多様な表現類を統一的に分析し、こうした表現類が文末形式化していく現象を文法化（モダリティ形式化）の事例と位置づけるための視座を提供しており、実際の分析結果においても、その有効性を十分に発揮している。

また、本論文の論述は、大量の文脈付きの実例に支えられており、日本語の使用実態に忠実である。このことは、豊かな言語事実の発掘につながっている。

非常に明晰な文章で書かれていることも、本論文の長所である。申請者は、在学中にネイティブチェックを必要としないほどの日本語文章力を身に附けている。誤植もきわめて少ない。

本論文において、不十分な点や今後の課題とすべき点としては、次のようなことがある。予備論文からかなり改善されたとは言え、まだ記述に精粗がある（重複がある一方で、記述の少ない部分もある）。また、形式自体の機能と認定してよいか、何を典型と考えるか、といったことについてはまだ議論の余地があろう。さらに研究を深化させるためには、文法化、モダリティ化のプロセスについてもう少し原理的な追究がほしいところもある。しかし、これらの短所や課題は、本論文の本質的な価値を減ずるものではない。

本論文が対象とする表現形式類は、引用表現としては典型的でなく、モダリティ形式としても周辺的であることから、従来の引用研究やモダリティ研究では十分に考察されておらず、これらを組織的・体系的に考察したのは、本論文が初めてであると言ってよい。引用研究とモダリティ研究をつなぐものとして、申請者の研究には、今後の更なる発展が期待される。

審査委員会は、以上のような審査を経て、本論文を博士の学位論文として認定することについて、全員一致で合意した。